

中国における無形文化遺産の研究：河北農村の民間 信仰「捉黄鬼」を事例として

白，松強

<https://hdl.handle.net/2324/1500483>

出版情報：九州大学，2014，博士（人間環境学），課程博士
バージョン：
権利関係：やむを得ない事由により本文ファイル非公開（3）

氏 名 : 白 松強

論 文 名 : 中国における無形文化遺産の研究—河北農村の民間信仰「捉黄鬼」を事例として

区 分 : 甲

博 士 論 文 の 要 約

21世紀に入ってから、自国の文化を前面に押し出すことによる、ソフト・パワーの役割が注目され、世界各国がこれを重視するようになってきている。中国も例外ではない。2003年、ユネスコの無形文化遺産保護条約を締結して以来、中国ではソフト・パワーに関する議論や活動が盛んに行われている。その具体的な内容や強化策については、中央政府にとって国家の総合的な能力に影響しかねないものとして重視され経済力や軍事力に代表されるソハード・パワーと同時にソフト・パワー強化の取り組みを推進していかなければならないと主張されている。

本論文は、現代中国の農村社会文化を軸足にして、民間信仰や民俗宗教などの無形文化遺産（非物質文化遺産）登録をめぐるポリティクスに焦点をあてて、フィールドワークによって洞察と分析を試み、中国農村地域の伝統文化がいかに資源化・遺産化され、国家の文化表象として管理・運営の対象になってきたかについて文化人類学的研究を行ったものである。具体的には、グローバリゼーションの中で復興する中国農村地域の伝統文化の現状を、同地域の政治・経済・社会的変化という文脈に位置づけ、とりわけ、遺産化の過程において、諸関係主体間（中央政府、地元政府、村委員会、村祭保存会、役者、村民など）の闘ぎ合いをめぐって、その複雑性や多様性の有り様に重点を置いて、農村地域の伝統文化を創発・変容させていく過程を描き出し、現代中国農村における文化統合の状況を明らかにすることを目的とするものである。

本論文は、序論、第一章の「世界無形文化遺産時代の伝統的文化の保存振興」、第二章の「固義村におけるフィールドワークによる民間信仰の記録」、第三章の「民族主義下における伝統文化のナショナル・ブランド化」、第四章の「政府の管理下となる伝統文化の変容とその影響」及び結論という順序で構成されている。

序論は、「研究の背景」、「研究の目的」、「研究の方法」「本論の構成」から構成され、本論文の概要を提示した。本論文は全体として序論、本論、結論からの三部構成となっている。序論では、まず21世紀に入った中国では1600件以上を超える大規模な認定を行なっている無形文化遺産保護事業の背景と特徴について簡単に説明し、浮き彫りになる問題点を指摘した。その上で、中央政府や歴代の為政者において無形文化遺産がどのように扱われてきたかを切り口にし、何を明らかにしようとしているのかという「問題」を問題提起や本論文の目的として提示し、その研究意義と位置づけを明らかにする。最後に本論文で行った調査方法ならびに内容の構成について述べている。

次にテキストについてであるが、本論文は四章より構成されている。

第一章「世界無形文化遺産時代の伝統的文化の保存振興」では、まず、21世紀に入ってから、グローバリゼーションの進行に伴い、国家間の交流においても、政治力・経済力に代わり、伝統文化などが力を発揮する役割が相対的に大きくなった[青木2011]。したがって、多くの国においては伝統文化などを復興させようという運動が国家戦略として積極的に推進されていることを示した。次に、日本、韓国、中国における無形文化遺産の保護はどのような状況にあるのだろうかを問題視している。また、このような背景の下、昔々から、文化交流が続けられてきた日韓中三国は、21世紀に入ってから、自

国の文化立国政策を踏まえて、文化保護経費を大幅に拡充し、伝統文化を復興するという偽りの看板を掲げて、無形文化遺産の保護分野でユネスコを舞台にして、ねじ曲がった道に突き進んで、東アジア地域は世界最大級の「文化拡張競争」の場として形成されつつあること[松本 2006]を指摘した。最後に、中国における無形文化遺産保護の歩みと復興を事例として取り上げ、江沢民時代と胡錦濤政権期、特に WTO への加盟を実現した 2001 年からの 10 年来、中国政府は中国と中国人のアイデンティティを確立・維持するために、自民族の「伝統」、「誇り」、「優位性」などの文化を唱え、復元主義的に構成せざるを得ない隘路に陥った現代の無形文化遺産保護政策の現状[岩本 2013 : 49]を概観し、その諸実践の歪みを試みたいと考えている。

現代中国における無形文化遺産の保護実態を明らかに把握するとともに、その特徴についても考察するために、具体的な事例を選定することが必要である。本論文はこの目的に沿って、河北省武安市に属し、多くの伝統文化に恵まれている固義村を調査対象として実施した。この村には何百年も祖先から受け継がれてきている民間信仰の一つの「捉黄鬼」がある。かつて毛沢東時代には、この村祭りは時代遅れの封建的な迷信と見なされ、弾圧・禁止されていたが、21 世紀に入ってから、中央政府は新たな文化立国中国の実現を図るためには、2006 年 5 月、固義村の捉黄鬼は国家レベル無形文化遺産の代表的な一覧表に指定された。一面的に捉えず、この民間信仰がいかにかに遺産化され、再構築されるのかを多面的全面的に考察するために、最初にこの固義村の概況、歴史的な変遷などについて述べたい。

第二章「固義村におけるフィールドワークによる民間信仰の記録」では、まず、村祭りの捉黄鬼の上位カテゴリーの民間信仰について、その現代的表象とその歴史的変遷に検証する。建国初期から 1980 年代中期までの長期にわたって、民間信仰は中央政府から前例のないほど軽蔑されるようになった。しかし、今日は国家を代表する文化的表象へと大きく政策転換した。ここでは、民間信仰を取り上げ、それがどのような立場に置かれ、どのような経験を重ねてきたか、中国の民間信仰政策の性格を分析した上で、第二章及び第四章での展開に備えた。次に、調査地・固義村の概要とその村の築いてきた歴史文化の独自性を掘り起こし、現代中国における農村部の全体像を示す。最後に、村の李氏祠堂の事例調査に基づき、中国農村における祖先祭祀などの復興の取り組み及び変容過程や要因を明らかにすることを目的とする。近代化が進んでも農村の人々の間で根強く残っている伝統祭祀の中国の農村生活や社会における重要性を喚起すると同時に、近年、復興の取り組みが見られる中で、一定の変容を遂げていることを提示しようと思う。

第三章「民族主義下における伝統文化のナショナル・ブランド化」では、まず、フィールドワークに立脚点を置き、現地に大きな影響力を持つ民間信仰の一つとして生まれた捉黄鬼を事例として、その伝統行事を現場で体験することで、捉黄鬼の演出経過を記録することにより固義村の多種多様な信仰や風土などの様子を伺う。次に、文化立国という国家政策の下に、民間信仰の捉黄鬼が国家政策に応じて、地方政府や各エリートの鼓吹で、表象化・遺産化・再構築された経緯や過程に着目し、特に捉黄鬼がいかにかに政府に貼られた迷信というレッテルから外されるのか、伝統文化の諸側面が資源化されている現状とそれに関わる問題点について考察する。「確かに一集団内での言語使用の総体が比較的安定した体系を指向しているということは言えるとしても、言葉の「本来の用法」だとか「文字どおりの意味」だとかを仮定したり確定しようとする努力がつねに困難に陥るという事実が示しているように、『ズレ』がそれとの関係で測定できるような絶対的な基準、不動の中心はアприオリには存在しないのである」[浜本 1985 : 114] と浜本が論文で指摘したように、文化保護において、現在の体制や評価では、行政が恣意的に解釈できる部分が多い。最後に、地方政府及び文化行政が、民間信仰の捉黄鬼に対して、現実政治や文化政策的な需要拡大にしたがって、どのように恣意的に捉黄鬼を再解釈・再利用するのか、という課題に対して、捉黄鬼を問題の切り口として取り上げ、文化政策や行政は国民の信仰に必要以上の干渉を加えることを指摘してみる。

第四章「政府の管理下となる伝統文化の変容とその影響」では、まず、行政と民間の両方にインタビューして、かつては宗教的な儀式であり、厳かな「祀り」であった村祭りの捉黄鬼は、文化政策とともに、新たな「イベント型」一観る祭りへと変容されてきたことは、官と民との両方がその認識の違いを問題点に考察することを目的とした。次に、民間信仰の捉黄鬼が文化遺産化される過程で、様々な主体間、例えば、中央政府、地方級行政、各エリート、村民委員会、村民異世代、観光客のような上位（官）と下位（民）、ゲスト側とホスト側、信者と未信者の間でどのようなせめぎあいが見られるのかという視点に留意して、新たな見解を提示したい。最後に、国家が謳えられ、地域経済の活性化と地域アイデンティティの確立の二点に集約された村祭りの捉黄鬼が、無形文化遺産に認定された後に観光化・商業化としての性格を強めていくにつれて、村の村民らのライフスタイルにどのような影響をもたらしたか、村の社会文化にどのような変化が起こっているのかを考察してみた。

結論で、本論文を総括している。伝統文化や民族文化などに関する無形文化遺産保護について、日本・韓国・中国どの国でも、これまで「文化立国」や「文化ナショナリズム」といった歴史的に前例がある保護政策や振興方法で自国の無形文化財保護に取り組んできていることについての先行研究は多い。本論文は、しかし、(1)中国だけでなく日韓中全体の無形文化遺産保護の現状を俯瞰し、各国家が自国の文化を拡張し、他国よりも文化面で優位に立とうとする狭隘な文化ナショナリズムを指摘して、その全容を解明するには研究の問題点を示す。(2)その事例として、中国華北の小さな農山村で守られ続けてきた民間信仰の文化資源化及びその諸関係主体間のせめぎあいに着目して多角的・多面的に考察し、その裏に隠された為政者の真実な意図を見抜き、本論文の到達点を示している。本稿はあくまでも試論であるが、暫定的な結論として、現在の中国全国津々浦々に行なわれている無形文化遺産保護運動という動きが、文化遺産保護より、むしろ、文化立国を実現するためには、中央政府が既存の文化認識の枠を越え、創られる行政手段の一つにすぎない、アジアの文化拡張競争、その中心に中国の存在、との見方を提出する。

本論で事例として取り上げられた民間信仰の捉黄鬼は、伝統文化に関連する国家や地方の行政機関の主導で、ユネスコ無形文化遺産に登録される手順を踏んでいる。その目的は言わずとして、他ならぬ文化立国や経済発展にあり、仮に世界無形文化遺産に登録されれば、国家のソフト・パワーの向上、観光開発に関わる地域経済振興による域内所得の拡大が保証されたようなものである。しかしながら、国家レベル無形文化遺産という文化ブランドを得たことにより、あまりにも性急に進む観光開発と地域村落の間に様々な歪みが生じ、当の国家レベル無形文化遺産登録対象に深刻な変容を与えてしまったところが見られる。一方、その後、地方行政の姿勢は、民間信仰の真実性を全く無視してひたすら観光開発政策に走り、村人からの意見や批判を排した。結局、住民や行政の熱意も冷めて、いつしか無形文化遺産そのものの崩壊が進行すると言った悪循環を招いている。こうなれば、貴重な無形文化遺産は「二度と取り戻せなくなるだけでなく、文化干渉や観光開発による地域経済振興の術さえも失われてしまうことになる」[藤木 2010:2]。

このような実情と実態を踏まえて、本論は、人類全体の文化保護を視野に入れながら、新たな眼差しをもって中国農村地域において長い年月をかけて育まれてきた民間信仰の捉黄鬼を事例として、その奥に隠された中央政府や地方政府の思惑を明らかにした。ユネスコの無形文化遺産や中国の国家レベルの無形文化遺産を問わず、そこに登録されている項目は、人類共通の宝物として未来の世代に引き継いでいくべきものである。しかしながら、これらはユネスコや中国政府による一つの基準によって選定されたものに過ぎず、スポーツの競技種目のような優勝・準優勝・3位といった序列はない。また、「地域の特色を形成する文化的価値という側面から見れば、ユネスコの無形文化遺産に登録されていない文化遺産がユネスコのそれよりも劣る、ということでは断じてないのである」[藤木 2010:3]。これは同じように、中国における国家レベル無形文化遺産の指定という中央政府により創設された制度にも当てはまると筆者は考えている。